

関ヶ原 研究会 寄稿集



関ヶ原合戦図屏風(関ヶ原町歴史民俗学習館蔵)



関ヶ原研究会寄稿集

発行日 令和6年10月

発行・編集 岐阜関ヶ原古戦場記念館

〒503-1501 岐阜県不破郡関ヶ原町関ヶ原894-55

TEL 0584-47-6070

<https://sekigahara.pref.gifu.lg.jp>



はじめに

慶長五年（一六〇〇）九月十五日に美濃国（岐阜県）関ヶ原で行われた天下分け目の戦い「関ヶ原の戦い」については、関ヶ原の戦いに至るまでの経緯や、本戦での東西両軍の攻防、その後の江戸幕府開府への流れなどについて、江戸時代から今日に至るまでの豊富な研究蓄積があり、通説あるいは定説といった以上に、関ヶ原の戦いの常識といえるものが形作られてきました。

しかしながら、近年、史料の研究が進み、常識とされてきた内容を見直す新説が積極的に提示されています。さらに、新説に対する検証、反論が出され論争になるなど研究が大いに活性化しています。

このような研究情勢を踏まえ、岐阜関ヶ原古戦場記念館では、令和五年十月十四日に第一線で活躍する歴史研究者を会員とする関ヶ原研究会を設立し、関ヶ原研究の深化・発展に向け、講演会・討論会等を通じた最新研究状況の発信、若手研究者の支援などに取り組んできました。

今回、その取り組みの一環として、近年、関ヶ原の地において講演された十名の会員の皆様に最新の研究成果や研究内容を執筆いただいた寄稿集が完成しました。

この一冊をもって、関ヶ原研究の現在が分かる内容となっていますので、ぜひ、ご覧いただき、皆様が関ヶ原の戦いをより詳しく知る一助としていただければ幸いです。



岐阜関ヶ原古戦場記念館

目次

関ヶ原研究最前線	小和田 哲男	P4
石田三成の戦略と誤算 関ヶ原の勝敗を分けたものは何だったのか？	太田 浩司	P6
関ヶ原合戦東西両陣営の形成過程	笠谷 和比古	P8
関ヶ原合戦前における徳川家康 ―羽柴家親類の有力大名としての実像―	柴 裕之	P12
大谷吉継と前田利長 ―一通の利長書状を読む―	外岡 慎一郎	P14
関ヶ原合戦と城郭	中井 均	P16
関ヶ原の戦いへの島津家の対応 ―なぜ義弘は寡勢だったのか？―	新名 一仁	P19
関ヶ原合戦前日に毛利氏は東軍と和議を結んでいたのか？	水野 伍貴	P22
関ヶ原における毛利家	光成 準治	P24
関ヶ原合戦研究の新視点	矢部 健太郎	P26
関ヶ原合戦布陣図		P28
関ヶ原合戦関連年表		P30

関ヶ原
研究会
寄稿集

関ヶ原研究最前線

岐阜関ヶ原古戦場記念館館長

小和田 哲男



歴史には、通説あるいは定説といわれるものがある。多くの研究者が納得し、「それでいいだろう」と承認されたもので、概説書などにも取り上げられ、中学・高校の日本史教科書も通説・定説に沿って叙述されることになる。そうしたことから、通説・定説は不動のもの、不変であると思われるかもしれないが、そうではない。通説・定説も、新説の登場によって、常に書き換えられているのである。

私自身、中学校の日本史教科書の執筆陣の一人に加わっているが、三年ないし四年に一度、教科書会社から書き直しを求められている。そのようなこともあり、研究は常に進んでいるとの印象を持っている。そこで、ここでは、関ヶ原の戦いに限定して、通説・定説がどのように書き換えられているかをみていくことにしたい。

まず取り上げるのは、戦いのきっかけとなった福島正則ら豊臣七将の石田三成襲撃事件についてである。古くは、豊臣七将が大坂の石田三成邸を襲撃したとき、三成は伏見の徳川家康邸に逃げ込み、家康

が七将を説得し、奉行を解任し、三成を佐和山に蟄居させたというのが通説だった。それを一九九四年、笠谷和比古氏が『関ヶ原合戦』（講談社選書メチエ）で、三成が逃げ込んだのは家康邸ではなく、伏見城の治部少丸だったことを明らかにし、それが通説となっていた。

この段階では、この事件を石田三成襲撃事件とし、七将らとの軍事衝突としてとらえられていた。ところが、その後、水野伍貴氏が『関ヶ原への道―豊臣秀吉死後の権力闘争』（東京堂出版、二〇二一年）において、「七将の襲撃ではなく、訴訟事件だった」とする新しい解釈を提示され、研究者の間でも注目されはじめている。

次に取り上げたいのが「小山評定」論争である。通説では、慶長五年（一六〇〇）七月二十五日、会津上杉攻めのため下野小山（栃木県小山市）まで進んでいた家康らの軍勢が、三成率兵の報を受けて、そこで軍議を開いた結果、上方に戻り、三成と戦うことに決まったというものである。

この通説に対し、白峰旬氏は「フィクションとしての小山評定―家康神話創出の一事例―」（『別府大学大学院紀要』十四号、二〇一二年）という論文で「小山評定」はなかったと結論づけている。それに対し、本多隆成氏が「小山評定の再検討」（『織豊期研究』十四号、二〇一二年）という論文で白峰説に反論し、この論争は今も続いている。私は、論争に加わる史料的根拠を持っているわけではないので、印象批判といわれるかもしれないが、あれだけの大軍が足並揃えて三成と戦うために軍を西に戻しているところを見ると、何らかの意思統一の場があつてしかるべきと考えているので、「小山評定」はあったと考えているところである。

白峰氏は、ほかにもいくつか新説を提起しているが、その一つは、「合戦場は関ヶ原ではなかった」とするものである。白峰氏は、当時の人が書いた一次史料には、「濃州の山中において一戦」とあつたり、「美濃の内の山中という所にて御合戦を遂げた」などとあり、戦場は関ヶ原ではなく、山中（岐

阜県不破郡関ヶ原町山中）だったとし、これまで通説とされてきた参謀本部編『日本戦史 関原役』の東西両軍布陣図をフィクションと断定した（白峰旬著『新解釈 関ヶ原合戦の真実』宮帯出版社、二〇一四年）。

この、戦場を山中とする説に対しては、その後、笠谷和比古氏が『論争 関ヶ原合戦』（新潮選書、二〇二二年）で反論しており、この「山中」を字名としての「山中」ではなく、山間部を意味する「山中」とみるのが正しいように思われる。

なお、『日本戦史 関原役』の東西両軍布陣図をフィクションとする主張に対しては、小池絵千花氏が「関ヶ原合戦の布陣地に関する考察」（『地方史研究』四一一号、二〇二一年）で反論を加えており、納得がいく。

ここまで「関ヶ原研究最前線」ということで、通説・定説に対する新説のいくつかを取り上げてきたが、最後にもう一つ、ホットな話題となっている「玉城問題」を取り上げたい。これは、これまでみたような著書・論文ではなくテレビ放送なので、本来なら、取り上げる必要がない対象なのかもしれないが、多くの人が関心を持っているようなので、みておきたい。

これは二〇二〇年十二月十九日、NHK・BSプレミアム「決戦！関ヶ原 空からスクープ 幻の巨

大山城」で取り上げられたものである。この番組に解説者として登場された城郭考古学者の千田嘉博氏が、赤色立体図で城郭として確認された玉城（岐阜県不破郡関ヶ原町玉）の縄張を紹介し、「ここに石田三成は豊臣秀頼を入れようとした」と発言し、関ヶ原の戦いと玉城を関連づけたことでにわかに注目されることになった。

この新説に対し、文献史料を専門とする研究者からは、「一次史料にも、二次史料にも秀頼の入城を想定して築かれたという記述は全くない」と否定的で、また、城郭史研究者からは、「城は関ヶ原の戦いの頃より古く、戦国初期のつくりで、縄張から想定すると、美濃と近江が敵対関係になった頃、すなわち、織田信長と浅井長政が戦っていた頃のものではないか」との声があがっている。いずれにしても、関ヶ原の戦いと結びつける新説に対し、現時点では反論の方が多い。

三成が毛利輝元の出陣を要請していたことは『古今消息集』所収の増田長盛宛三成の密書によって知られているので、豊臣秀頼ではなく、毛利輝元を玉城に入れる可能性はあったかもしれない。しかし、その場合でも、玉城より、城としては松尾山城の方が大きく、しかもしっかりしたつくりとなっていたので、私は松尾山城の方に毛利輝元を入れようとしたのではないかと考えている。玉城は関ヶ原の戦い

とは無関係ではないだろうか。

その他、今回は触れることができなかったが、例の直江状の真贋論争もあり、関ヶ原の戦いをめぐっての研究はこれからも目が離せない。



決戦地



石田三成の戦略と誤算

関ヶ原の勝敗を分けたものは何だったのか？

はじめに

関ヶ原合戦に関する研究は最近目覚ましい進展がある⁽¹⁾。その中で、石田三成は如何なる思いで、家康を迎え討とうとしたか。あるいは、どんな戦略で大垣城に籠城し家康を待ったか。家康はなぜ大垣城攻撃をやめて関ヶ原へ向かったか等々を、近世の軍記物に頼らず、なるべく一次史料や現場の記録から辿ってみたい。合戦当日の戦略も、両者の思惑を考察し、石田三成の視点から関ヶ原合戦の真相について迫りたい。

尾三・濃尾国境決戦の構想破綻

慶長五年（一六〇〇）七月十一日、石田三成は佐和山城で大谷吉継・安国寺恵瓊らと会談し、家康打倒の相談を行なったとされる⁽²⁾。ここで西軍拳兵の盟主に五大老の一人毛利輝元を仰ぐことに決め、輝元もその招きに応じ、十七日に大坂城西の丸に入った。同日、長束正家・増田長盛・前田玄以の三奉行の名で、徳川家康の罪状十三ヶ条を列挙した「内府

この動きを察した三成は、美濃と近江の国境に全軍を進め、近江への街道を封鎖する形で東軍の進軍を止める作戦に出た。西軍は夜陰の中を行軍し、東軍の先回りをする形で関ヶ原に全軍を展開する。

吉川広家の文書を読む

ここで、西軍の吉川広家の自筆書状について検討を加えてみよう⁽⁵⁾。この書状では、関ヶ原合戦を一日としてしているので、九月十七日に作成された文書で、南宮山に陣を置いた吉川広家が、合戦の状況を主君の毛利輝元に報告するために記された覚書である。この中で、十五日の合戦で、東軍は軍勢を「二手」に分けたと記し、その一手が「山中」村に押し入ったとしている。この押し入った軍隊が、徳川家康が主力と判断していた福島正則と黒田長政の軍で、その後から加藤嘉明と藤堂高虎が続いたとされる。

本書では合戦後の十六日、近江へ攻め入る際にも、「二手」に分かれて「乱入」し、東軍に身を転じた吉川は「北口之手」を任されたと記す。この「二手」に分かれての近江侵攻は十六日の話だが、十五日の「二手」と同じ道筋を指すのではないだろうか。その一方が、後代の中山道を通る山中村であれば、もう一方の「北口之手」は、関ヶ原宿から分れた北国街道を通る小池村と見るべきだろう。

ちがひの条々」が各大名に送られ、三成を中心とする西軍は家康への宣戦布告に踏み切る。八月一日には、東軍の鳥居元忠が守る伏見城が、三成等の西軍に攻撃され陥落する。

八月五日に、石田三成が真田家へ送った手紙からは、三成の合戦構想が垣間見られる⁽³⁾。そこでは、尾張国と三河国の間以西を勢力圏と見て、その国境での決戦構想を持っていた。また、清洲城主であった福島正則の西軍への囲い込み工作を続けていたことが知られる。秀吉股肱の臣である正則の西軍参加は、濃尾地方の中心である清洲城主という地位もあって、三成は大いに期待していたようである。

八月十一日には、三成は美濃大垣城へ入ったが、福島正則の取り込みに失敗したことを知ったものこの頃であった。十日に三成が真田家に送った書状では、美濃・尾張国境の木曽川での決戦構想を表明する⁽⁴⁾。

大垣籠城戦から関ヶ原決戦へ

これらの記載から、「関ヶ原合戦」での家康の戦略は、山中村を突破して中山道を通り、佐和山へ至ることであった。これに対し、東軍の中にはもう一手の北国街道を守っていた三成本陣に向かった部隊もあったのである。この部隊も、三成がいた小池村を突破すれば、近江国内に侵攻する予定であった。関ヶ原合戦の西軍の布陣は「鶴翼の陣」と評される場合が多い⁽⁶⁾。しかし、古戦場の陣形は、北国街道を押さえる三成陣、中山道を押さえる大谷・小早川の陣からなっており、その中間に位置する島津・小西・宇喜多の陣は、そのどちらにも展開できる体制を敷いていたと理解すべきだろう。

家康の関ヶ原移動の意味

家康はなぜ赤坂の陣所と大垣城での対峙を諦め、軍勢を西に進めたのであろうか。その答えが、関ヶ原に参陣した島津氏家臣の覚書『旧記雑録』の中に見えている⁽⁷⁾。同書の「神戸五郎覚書」に、大垣城の西軍は、家康をはじめとする東軍が、直接京都を目指すという情報を得て、南宮山下を通って軍を関ヶ原に展開したとある。石田三成は東軍が中山道と北国街道を通り、佐和山城から京都・大坂を直接攻撃するという情報を得たので、大垣城から出て関ヶ原へ出陣したと考えられる。

関ヶ原は、近江に入る両街道の分岐点であり、江

八月二十三日に岐阜城攻撃が行われた。東軍が西軍の岐阜城を攻め立てた際、三成は岐阜城支援のために長良川の渡し・河渡（岐阜市）まで出陣したが、黒田長政・藤堂高虎によって撃退され敗退した。岐阜城陥落により三成の木曽川での決戦、つまり美濃・尾張国境での決戦構想が破綻し、決戦の地は美濃国内へ移る。二十四日、東軍は美濃赤坂の岡山（岐阜県大垣市）に陣を敷く。岡山は三成が籠る大垣城から西北へ四キロの場所にあり、両軍の対峙が始まった。ここで、三成は大垣籠城戦を決意することになる。

九月十四日、東軍諸将に遅れて関東をたった家康が岡山の本陣に到着する。動揺する西軍の士気を鼓舞するため、三成の家臣・嶋左近は、大垣城と岡山の間にある杭瀬川で、東軍の中村一栄・有馬豊氏隊へ挑発を行ない、中村の家老の野一色頼母を討ち取るなどの戦果を上げる

その日の夜、家康は諸将と軍略を議し、大垣城を攻めず、西に進み関ヶ原に軍を進めることにする。

濃国境という重要地点であった。三成の頭の中には、絶えず国境を意識した防衛ラインがあったように見える。江濃国境は、三成が考え得る最後の防衛ラインだったのである。

三成は中山道と北国街道が分岐し近江に至る関ヶ原で決戦を挑む必要があった。東軍は当然のことながら、両街道の突破を狙った。関ヶ原合戦とは、三成による国境・街道封鎖の結果、関ヶ原で起きた合戦なのである。それは、戦略の誤算の繰り返しで、最後まで態勢を立て直すことができなかった。

註

- (1) 小池絵千花氏「関ヶ原合戦の布陣地に関する考察」（『地方史 県研究』四二、二〇二年）、拙編著『石田三成 関ヶ原西軍人脈が形成した政治構造』（宮帯出版、二〇二三年）に掲載された諸論文など。
- (2) 以下の関ヶ原合戦に至る経過は、藤井治左衛門『関ヶ原合戦史料集』（新人物往来社、一九七九年）、拙稿「石田三成の戦い」白峰旬編『関ヶ原大乱、本当の勝者』（朝日新書、二〇二〇年）を参照。
- (3) 慶長五年八月五日 石田三成書状 真田昌幸・信幸・信繁宛（真田家文書、『愛知県史』資料編三、二〇二年）所収
- (4) 慶長五年八月十日 石田三成書状 真田昌幸・信繁宛（浅野家文書、『愛知県史』資料編三、二〇二年）所収
- (5) 大日本古文書『吉川家文書』二（東京帝国大学、一五二五年）所収
- (6) たとえば、『必見！関ヶ原』（岐阜県、二〇一八年）の「6 開戦地」の項目では、西軍が鶴翼の陣、東軍が魚鱗の陣と記す。
- (7) 『鹿兒島県史料 旧記雑録後編』三（鹿兒島県、一九八二年）所収

関ヶ原合戦 東西両陣営の形成過程

国際日本文化研究センター名誉教授

笠谷 和比古



はじめに

関ヶ原合戦は、家康の会津討伐の軍事動員から始まる。会津一二〇万石の上杉景勝をめぐる謀叛の嫌疑がわき起こり、家康は上杉側に、これらの疑念を示したうえで、上杉景勝に上洛して弁明すべきことを命じた。

これに対して上杉側は、執政の直江兼続が長大な弁駁の書を認め、家康側の糾明事項に逐条反論し、上杉謀叛を言い立てる讒言者の究明こそ第一になすべきとして、上杉景勝に対する上洛命令を真つ向から拒絶した。これに激昂した家康は会津征伐を呼号し、六月十六日、家康みずから征討軍を率いて大坂から会津に向けての遠征の途についた。

一、関ヶ原合戦、西軍の形成過程

1. 三成挙兵

慶長四年（一五九九）以来、政界からの隠退を余儀なくされ佐和山に退いていた三成は、同五年になつて家康が会津征討のための出陣の動きを見せた

ところから挙兵の決意を固めていく。七月十日頃、

会津征討に参加すべく敦賀から中山道垂井宿に到着した大谷吉継を佐和山城に呼び寄せ、家康討伐の挙兵計画を打ち明けた。吉継はその企てを無謀としたが、三成の度重なる要請についに折れ、協力を約束した。

同十二日、毛利家の外交僧にして武将である安国寺惠瓊が佐和山城を訪れた。惠瓊は家康の会津征討に参加すべく中山道を進んでおり、その途次に佐和山に立ち寄ったのである。しかし三成と面談して家康討伐の挙兵計画を聞かされたことから、広島にいる毛利輝元に出陣要請の急使を派遣するとともに、惠瓊自身は大坂に戻り、豊臣三奉行（前田玄以・増田長盛・長束正家）を説得して、豊臣公儀が三成たちの挙兵蹶起を支持するように求めた⁽¹⁾。

豊臣三奉行そして淀殿は、三成の挙兵の企てを聞かされておらず、その不穏な情勢に困惑するばかりであり、会津遠征の家康の下に書状を送って、早く上方に戻って、三成たちの動きを鎮静してほしい旨

を要請していたのである⁽²⁾。

家康が豊臣家の将来にとって危険な存在であることは言うまでもないが、石田と大谷の軍勢で叶う相手でないことも明白である。しかし毛利の大軍が三成側につくのであれば、これは別儀となる。そこで三奉行は毛利輝元に急ぎ大坂に来るように求める連署状を発し、詳細は安国寺惠瓊が記す副状にあるとした。惠瓊が輝元に対して三成たちの企てに加わるよう要請することは当然のことであつた。

そしてその輝元は同月十五日には大軍を率いて軍船で広島を出発したということ、そして同十六日夜に大坂に到着した⁽³⁾。大坂に入った輝元は、出迎えた惠瓊のお膳立てで、そのまま反家康軍の総帥という形に祭り上げられていくこととなる。

なお輝元が七月十四日に惠瓊から上坂要請の書状をもらって、翌十五日に大軍を率いて広島を出船するということは信じられないので、毛利はあらかじめ三成と通じていたとする見方が多いが、それは事実には反する。輝元は惠瓊と吉川広家の二人に会津攻

めの先手を命じていたことから⁽⁴⁾、毛利本隊も会津出陣の準備をしていたということ。それ故に七月十五日の急速出陣が可能になったということである。

豊臣三奉行は、輝元が毛利の大軍を引連れて広島を出発したという情報を得たことによって、その陣容ならば家康の徳川勢力に対抗しうると判断し、そこで三成・毛利連合勢力の側に加担することを決断した。

その決断の公式表明が、同月十七日に発出された、家康に対する糾弾状であり宣戦布告でもある「内府ちがひの条々」に他ならない。すなわち、太閤秀吉が定め置いた五大老五奉行の体制を、家康は解体し、奉行を罷免し、大老前田利長を謀叛の嫌疑で屈服させ、いまま大老上杉景勝の討伐の軍を起こす。自分の味方には知行を与え、内密の婚姻を重ねているなど、家康の非違を十三ヶ条にわたって書き連ねる。

そしてこの弾劾状に添える形で、前田玄以、増田長盛、長束正家の三奉行による連署状が発出され、「太閤様御恩賞を相忘れられず候ハ、秀頼様へ御忠節あるべく候」⁽⁵⁾と秀頼への忠節を尽くすべきことを強調していた。

こうして大坂三奉行の旗幟は鮮明となつた。すなわち豊臣公儀の正当性は、家康から奪われて三成・輝元の連合勢力の側に与えられることとなつたので

ある。三成の反家康の挙兵蹶起の行動は、今や毛利

の大軍勢を動員し、豊臣公儀の正当性を獲得するに至つた。そしてこの豊臣公儀の正規軍は「秀頼様への忠節」を唱えることによって、より大規模で全国的な広がりをもつ動員を可能とすることとなつた。

七月十九日、宇喜多秀家・島津義弘・小早川秀秋らが西軍に参加し、家康方の上方の根拠地たる伏見城を囲んだ。さらに二十三日には毛利配下一万の軍勢が伏見城攻撃に加わつた。

そしてこれまで満を持して佐和山を動かなかった石田三成は、同月二十九日にいたつて同城を発して伏見にいたり、攻城諸將を督励したのち大坂城に入つて毛利輝元と会同した。関ヶ原合戦における西軍の体制の完成された姿がそこにあつた。

二、関ヶ原合戦、東軍の形成過程

1. 会津征伐

慶長五年（一六〇〇）六月十六日、家康は総大将となり遠征軍を率いて大坂を発し、東海道を会津に向けて進んだ。この家康の配下には、彼とともに上方にあつた井伊直政・本多忠勝・榊原康政・酒井家次ら徳川将士三千余人があることは言うまでもないが、それとともに数多くの豊臣系武将たちが随従した。すなわち会津討伐は徳川家康と上杉景勝との私戦ではなく、豊臣公儀の名の下に行われる謀反人上

杉討伐を目的とした公戦であり、家康は豊臣秀頼の名代として進軍するのであるから、所定の武将たちは義務として動員されこれに従わねばならないのである。

さて東海道を下つた家康は七月二日に、さきに帰国していた徳川秀忠の迎えを受けて江戸城に入つた。七月十九日に徳川秀忠ひきいる前軍が江戸城を発ち、二日後の二十一日には家康のひきいる後軍が江戸を出発した。

2. 小山の評定

家康の本隊は七月二十四日には下野国小山に到着した。だがその時、上方方面において石田三成が家康討伐の軍を起こしたとする報せが家康の下に届けられた。家康はここで全軍に進軍停止を命じ、武将たちに家康の小山の陣所に参集することを指令した。この小山の評定では、石田三成らの反家康挙兵という事態を受けて、家康に率いられて宇都宮までやってきた豊臣系武将たちの動向が問題となつたが、彼らは異議なく家康の味方ということと一致した。上方方面のことについては、情報をより詳しく探索したのちに行動方針を示すであろうと家康は述べ、会津攻めは中断として、駿河国より西に領地を有する武将たちは、全員、自己の領地へもどされた⁽⁶⁾。

彼らはその後、尾張国清洲城に集結して、木曾川をはさんで西軍の最前線にある岐阜城の軍勢と対峙の状態の家康の到来を待つべきこと、家康は会津の上杉勢に対する手当を終えたならば、直ちに同盟豊臣系武将たちの後を追って清洲城に向かうとした。徳川勢からは井伊直政が徳川軍の先手として清洲城に先行し、本多忠勝は軍目付の資格で井伊と同道して清洲城に入っていた。

3. 大坂奉行衆別心

しかるにこの時、東軍側に想定外の異変が生じ、東軍は大きな混迷に包まれることとなる。

すなわち小山の評定の行われていた七月二十五日から四日後の七月二十九日を境に状況が一変する。例えば小山の評定に参加し、その後、家康の指示にしたがって東海道を西上していた田中吉政や黒田長政宛の家康書状は次のように述べている⁽⁷⁾。

大坂奉行衆別心之由申し来り候間、重て相談せしむべきと存じ候所、御上り故、其儀なく候

すなわち、大坂奉行衆である増田長盛、長束正家、前田玄以の三奉行は、家康に対して敵対的行動をとってきたので、再度の相談をしたいと思いますのであるが、小山に参集していた武将たちは、みな東海

道を西上してしまったので、それができないことを嘆じている。

逆言するならば、それまでの時期においては、大坂の奉行衆は家康の味方であるという認識であったということである。さらには淀殿や大坂三奉行たちからも書状をもって家康に対して、早く上方に戻って石田三成らによる不穩情勢を鎮静してもらいたい旨の要請があった事実からも裏付けられる。

つまり石田三成が挙兵蹶起を企てていた当初は、淀殿と大坂三奉行たちは家康サイドであり、家康に豊臣公儀の正当性が付与されていた。しかるに前節で述べたように、安国寺恵瓊が大坂三奉行（および淀殿）に対して猛烈な説得工作を仕掛け、かつ毛利輝元をも動かして毛利の大軍が大坂に到着して、三成陣営に合流するという情勢を踏まえて、三奉行（および淀殿）は豊臣公儀の正当性を三成・輝元陣営の側に与え、家康を謀叛人として討伐の対象として宣告するに至っていた。

このような上方における情勢の急変の情報が家康の下に届いたのが、七月二十九日のことであったということである。

4. 東軍の混迷

東軍は小山の評定において、従軍の豊臣系武将たちは異義なく家康を支持し、その指揮命令に従って

重要な一角をなす真田昌幸の信州上田城を攻略することであった。

しかしながら、その後、同盟豊臣系武将たちの進撃があまりに目覚ましく、石田三成ら西軍主力の集結する大垣城まで一里余の地点まで進出したという報告を受けると、家康は急速西上に転じる。それは家康・秀忠の到着を待たずして、同盟豊臣系武将たちだけの力で東西決戦に決着がついてしまうならば、戦後政治世界における家康と徳川の立ち位置を失ってしまったかねないからである。

家康は中山道を進む秀忠の下にも使者を送り、上田城のことはさておき、急ぎ西上すべきことを伝えていた。しかるに不運なことに、この使者は川留めにあい、秀忠の下に到着したのは九月九日になってのことであった⁽⁹⁾。

秀忠軍はそれより急速西上に方向転換していくのであるが、その場合、上田城側からの追撃にも備えなくてはならず、結局、関ヶ原合戦における秀忠遅参という事態につながっていくこととなる。

家康は九月十一日に尾張清洲に到着する。ここで秀忠部隊がいまだ信州奥地にとどまっていることを知って愕然とする。秀忠部隊の到着を待つべきか、それとも戦いの機が熟していることを優先すべきなのか。清洲で一日を空費したのは、その逡巡の表れとも言われている。

石田三成らの反家康勢力を鎮定すべく行動するということでまとまっていた。しかし今や豊臣公儀の正当性は、家康ではなくて三成側陣営に移され、家康は豊臣公儀によって謀叛人の烙印を押され討伐の対象とされるに至った。この新たな事態の到来を知った従軍豊臣系武将たちの去就が、改めて問われなければならなくなる。

このきわめて回答困難な状況の中で、東軍は迷走状態に陥っていく。会津に対する手当を終えたなら、直ちに同盟の豊臣武将たちの後を追って前線に赴くと約束していた家康であるが、小山の陣所から八月五日に江戸にもどったのち、そのまま江戸城にこもって約一ヶ月の間、全国各地の武将たちに勧誘の書状を作成することに専念することとなる。それから書状を通して家康への与同を明確にしてくれた武将たちと、ともに戦うという作戦に切り替えようとしていたのであろう。家康に対する態度が今や不分明となっている、清洲に集結の従軍豊臣系武将たちとの合同作戦ではなくてである。

5. 岐阜合戦

しかるに清洲城に集結の豊臣系武将たちの動向は、家康の思いとは異なっていた。彼らの間では、家康はなぜ清洲に來ないのかと家康の心変わりを難ずる空気が支配的であった。徳川勢の先手として清

しかし同十四日、家康は岐阜を経由して美濃赤坂に入り、すでに布陣している同盟豊臣系武将たちの出迎えを受けて、これに合流した。家康自身が率いる徳川隊三万は赤坂の地の一段高い場所を本陣とし、同盟豊臣系武将たちの軍勢は、赤坂の地から押し出されるようにして垂井宿方面へと広がりがつつ、両者の連合軍でもって西軍主力の集結する大垣城と対峙すべく布陣した。関ヶ原合戦の東軍は、このような構成をもって形成されたのである。

【後注】

- (1) 慶長五年七月三日付毛利家大坂留守居益田元祥等三名連署状〔榊原康政等三名宛〕（『東京大学史料編纂所編』『大日本古文書・吉川家文書』二、九二号、東京大学出版会）
- (2) 慶長五年七月二七日付榊原康政書状〔秋田実季宛（中村孝也『新訂徳川家康文書の研究』中巻（日本学術振興会、一九八〇年））
- (3) 三卿伝編纂所編『毛利輝元卿伝』（マツノ書店、一九八二年）五八七頁
- (4) 慶長五年六月四日付毛利輝元書状〔安国寺恵瓊宛（『毛利輝元卿伝』五八〇頁）
- (5) 前掲『新訂徳川家康文書の研究』中巻
- (6) 黒羽、大関家文書、高橋明「小山の『評定』の真実」（『福島史学研究』九号、二〇三年）
- (7) 慶長五年七月二九日付徳川家康書状〔黒田長政宛（『新訂徳川家康文書の研究』中巻）
- (8) 板坂卜斎『慶長年中卜斎記』（『改定史籍集覧』第二六冊）
- (9) 『朝野旧聞稟藁』第三卷「別録、庚子信濃国上田攻城始末」之七（『内閣文庫所蔵史籍叢刊』特巻、汲古書院、一九八三年）

関ヶ原合戦前における徳川家康
——羽柴家親類の有力大名としての実像——

東洋大学非常勤講師

柴裕之



関ヶ原合戦が徳川・羽柴（豊臣）両家の対立でなく、豊臣政権内部の主導権をめぐる抗争であったとみられるようになってきている。そこで本稿では、関ヶ原合戦前までに至る徳川家康の豊臣政権内部における立場についてみていきたい。

まず羽柴秀吉（秀吉の家の苗字は羽柴であり、豊臣は氏姓である）に臣従し「豊臣大名」（豊臣政権下の領国大名）となるまでの家康のあゆみを確認しておこう。

家康は、三河岡崎城（愛知県岡崎市）を居城とした国衆松平家の生まれで、同家が従属していた今川義元のもとで養育され、今川家親類衆として日々を過ごしていた。ところが、永祿三年（一五六〇）五月に起きた桶狭間合戦での敗戦後の情勢を受けて、家康は三河岡崎城へ帰還、西三河における情勢対応のなかで今川家から独立、今川方勢力との戦いを経て三河国を治める戦国大名へと台頭していった。その後、織田信長との同盟、さらには従属のもとで、甲斐武田家と戦い抜き、天正十年（一五八二）三月

このことは、家康の官位にも示されている。豊臣政権では、官位は天下人秀吉を最上位に位置づけた序列のもとで各大名家の当主や武將の立場を示す称号としてあった。そのなか家康は、最終的には正二位内大臣にまで官位を昇進し、秀吉の次位に位置した。この官位の昇進は、正二位内大臣になる前の従二位権大納言段階までをみていくと、秀吉の弟・羽柴秀長と同待遇であったことがわかる（秀長は天正十九年（一五九一）正月に死去）。つまり、家康は秀吉の義弟として扱われていたのである。

この家康が秀吉の妹・旭を迎えて築かれた羽柴家との縁戚関係は、旭が天正十八年（一五九〇）正月に死去した後も、文禄四年（一五九五）九月に秀吉が婚約中に死去してしまった養女の小姫君（織田信雄の実娘）に代わって、別妻・淀殿の妹である江（崇源院殿）を養女として、徳川秀忠に嫁がせ維持された。さらに、羽柴・徳川両家の縁戚関係は、秀吉生前の約束に従い、家康が羽柴家に代わる天下人となった後も、秀忠と江の娘である千姫が秀吉後継の秀頼に嫁ぐことで続いていた。こうした羽柴家との重縁関係は、徳川家特有のものである。このように、豊臣政権下の徳川家が、天下人秀吉と縁戚関係を持つ親類だったということを確認すると、その後における家康の飛躍が改めて理解できる。

の武田家滅亡後には、駿河・遠江・三河の三カ国を領有する大名となる。さらに本能寺の変後に旧武田領国をめぐって、相模の北条氏政・氏直との戦い（天正壬午の乱）を経て、駿河・遠江・三河・甲斐・信濃の五カ国を治める大名へと飛躍した。

一方、信長死後の織田家内部の主導権争いに端を発した抗争から、やがて宿老の羽柴秀吉が台頭し、織田家に代わって天下人を目指し始める。これに対し、家康は当主の信雄を支持して秀吉との対立姿勢を示す。この結果、信雄・家康と秀吉との対立は、天正十二年（一五八四）三月に起きた小牧・長久手合戦へと発展する。そのなかで、開始当初の戦闘では、信雄・家康が勝利することもみられたが、最終的に秀吉の勝利に帰して、信雄・家康の「敗戦」で終わる。さらに翌天正十三年になると、家康は真田昌幸ら信濃国衆の離反、重臣の石川康輝（数正）の出奔や秀吉襲来の脅威によって、領国の存亡危機の状況へと追い込まれていってしまう。この事態の打開に、家康は秀吉への臣従に応じることになる。

秀吉への臣従後、家康は豊臣政権のもとで関東・奥羽地方に対する外交交渉と軍事的抑えとしての役割を期待され活動、天正十八年七月の関東仕置（小田原合戦後になされた今後の豊臣政権による関東統治のための処置）による徳川家の関東への移封も、その役割に基づいてなされたものであって、対徳川家政策としておこなわれたのではない。この関東への移封によって、徳川家は一躍二五〇万石を領有した最有力の豊臣大名となる。このように、徳川家は秀吉へ臣従し、親類という立場のもとに政治的・軍事的な保護を得たことで、豊臣政権における羽柴家親類の有力大名として、勢力を拡大してきたのである。

そして豊臣政権による「天下一統」〈国内諸勢力の統合〉がなり、「唐入り」（朝鮮出兵）が始まると、家康は肥前国名護屋（佐賀県唐津市）に参陣し、秀吉が不在の時は同じく親類大名であった前田利家とともに留守居を務めた。また、秀吉が山城伏見城（京都府京都市伏見区）で活動しだすと、家康も伏見に滞在して政権を支えるべく行動した。そのうえで秀吉が重篤、後継当主の秀頼が幼少という政権の危機に、前田利家、毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝とともに、いわゆる「五大老」に列し、秀頼が成人するまでの豊臣政権の運営に携わる。

その後、秀吉死後の政争のなかで、家康は豊臣政権の政庁であつた山城伏見城に入城、さらには羽柴

ただし、家康は秀吉への臣従に無条件で応じたのではなく、臣従後の立場と領国存立の保証を求めた。これに対し、秀吉は徳川家を離反した信濃国衆真田・小笠原・木曾の三氏を家康と共に行動する政治的・軍事的配下の与力として配置することで領国の存立を保証したうえ、自身の妹である旭（朝日）を家康に嫁がせることで、徳川家を羽柴家の親類とした。そのうえで、秀吉は天正十四年（一五八六）十月に正親町天皇の讓位に合わせて、上洛を求める。この秀吉の上洛要求に、家康は秀吉から母の天瑞寺殿（大政所）が人質として差し出されたことを受けて、自身の身に危害が加えられないよう保証を得たうえで、上洛した。そして、秀吉の面前で臣従を誓い、豊臣大名の一員に列したのである。

ここまでの豊臣大名となつた家康のあゆみを押さえ
たうえで、次に豊臣政權下における家康の立場につ
いてみていこう。彼の立場をみていくうえで注目し
たいのが、徳川家が五カ国を治める有力大名にあつた
だけでなく、天下人秀吉の親類にあつたことである。

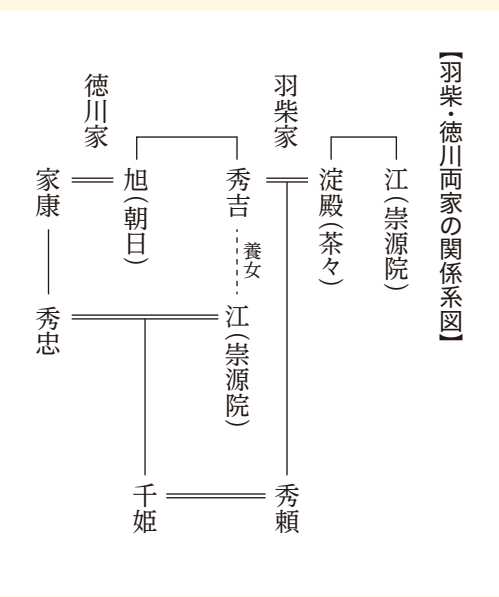
家居城の摂津大坂城（大阪府大阪市）での反抗を抑えたのちに同城の西の丸へ入り、羽柴家親類の有力大名という立場のうえに、秀頼後見の執政者として政権運営を主導していく。その一方、反抗の姿勢をみせる勢力には、政権に対する敵対者として軍事討伐をおこなっていく姿勢を示し対処した。こうした家康による政権運営への反発が広がって、最終的に慶長五年（一六〇〇）九月の関ヶ原合戦が起きる。ことになるのである。

主要参考文献

小川雄・柴裕之編『図説 徳川家康と家臣団』（戎光祥出版、二〇二二年）

黒田基樹『徳川家康の最新研究』（朝日新聞社）（朝日新聞）、二〇二三年）

柴 裕之『徳川家康―境界の領主から天下人へ』（平凡社
〈中世から近世へ〉、二〇一七年）



大谷吉継と前田利長
―一通の利長書状を読む―

これから紹介するのは前田育徳会尊経閣文庫にのこされた前田利長の書状である。加賀藩主前田家が編輯した『武家手鑑』に収録されている。

大谷吉継が関ヶ原合戦の直前まで、徳川家康主導となった豊臣政権のなかで家康と協働する機会を多く持っていたことは近年の研究で明らかになっているが、この書状もまたそうした吉継の立ち位置を知る重要な史料といえる。大谷吉継研究の分野ではこれまであまり素材とされてこなかった印象があるので、改めて分析を加えてみたい。

なお、書状の翻刻（写真照合含む）については、
太田昌二郎編『尊経閣文庫蔵武家手鑑釋文 付解題』
（臨川書店、一九七八年）を参照した。

(端裏) 「せうすい寺 はひ まいる 御返事」
返々、そこもとかわる／義御さ候ハ、うけ／
可給候、御ちんふれ候ハ、／両人の物かたへ／
早々御申し可給候、以上、
十七日の御状、昨日／廿一、はいけん申候、／誠に
御ねんの入／られ申こされ候、／しうちやく申候、
又々／あいつの義、いまた／すミ不申候、御出陣／

種村の書状は、家康の出陣（会津陣）や宇喜多騷動の終息について報じる内容であつたようだ。利長はこの返書で、会津陣については家康の指図次第にどこへでも出陣する意向であることを示し、宇喜多騷動終息の報に接して「めでたく存候」と安堵の意を伝えるとともに、上方で動きがあれば早々に報告するよう繰り返し要請している。

追伸部にみえる「兩人の物」とは、この書状を種村に届けた使者のことであろう。この使者は、書状の文面にはあらわれない利長の意思を種村に口上で伝え、また種村の返書とともに口上を携えて利長のもとに戻ったのである。

さて、注目すべきは、家康出陣への対応について利長が大谷吉継と相談することを種村に伝えていることである。

前年（慶長四年）九月、徳川家康が重陽の祝儀に大坂城の豊臣秀頼を訪ねる折にこれを襲撃、殺害する計略が利長を首謀者として立てられたとの嫌疑をうけ、利長誅伐の軍が派遣されようとした折に、和議解決に尽力したのが吉継である。吉継は利長の重臣横山長知（大膳）・有賀直政（宥加）に上洛を促し、弁明・和議交渉の機会をつくった。種村もまた和議交渉に参画して、最終的に利長の母芳春院と家老四人の人質を江戸に送ることで結着をみた。慶長五年三月のことである。（『加賀藩史料』慶長四年九月七日条、慶長五年三月は月条など）。

この書状で、利長が家康出陣について吉継と相談して家康の機嫌を損ねない対応をしたいと述べてい

あるへきやう二うけ／給候、我等義、いつ／かたへ
なりとも、／大府御さしつ／したい、まかりたち／
可申候、大刑御そうたん／申し、大ふ御前よき／や
う二申あけ度候、／ひせん中なこん殿／おとなとも
出入の／義も、大方すみ申候由、／めてたく存候、
そこもと／かわる義候ハ、うけ可給候、かしこ、

五月廿二日 利長（花押）

（充所欠）

(現代語訳)

(五月) 十七日の書状を昨日二十一日に拝見しました。誠に「ご丁寧(御念の入られ)」に申し越され、大変うれしく存じます。またまた会津の義(上杉景勝謀反疑惑)は解決に至りません。(家康が)出陣する見込みとのこと承りました。私(「我等」)はどこへでも家康(「大府」内府)の指図次第に出陣します。大谷吉継(「大刑」)と相談のうえ、家康の機嫌を損ねないよう(家康に)申し上げたく思います。宇喜多秀家(備前中納言)の老臣(「おとなとも」)どうしの諍いも大方解決したとのこと、安堵しています。そちらに変事があれば必ず知らせ

るのは、家康暗殺謀議についての和議が成ったばかりで、母親を人質に取られることになった以上、当面は家康の顔色を伺いながら前田家の安穩を得たいという思いのあらわれと読むことができる。和議交渉のなかで大谷吉継と種村肖惟寺は協働の機会をもったようであるから、利長は種村に吉継との連携も期待したのであろう。

一方、慶長五年五月下旬段階での大谷吉継の立場ということであれば、利長の期待にあきらかなように、家康との意思疎通に重要な人物として認識されていた。家康が「上杉征伐」を名目に伏見を発つのはこの書状の約一か月後の六月十八日のことであるが、吉継もまた六月末には会津に向けて出陣している。石田三成との共同謀議の気配はない。

ところで、芳春院が伏見を發つて江戸に向かうのは慶長五年五月十七日のことである（『加賀藩史料』慶長五年五月十七日条）。しかし、利長の返書であるこの書状に触れるところがない。十七日付の種村書状にも芳春院の出立について触れるところがない。なかつたのか知る術もないが、すでに、五月十三日付豊臣奉行衆連署の書状で浜松の堀尾忠氏に対して芳春院の江戸下向（東海道）について宿泊等の世話を勤めるよう指示が出されている（尊經閣古文書纂）。おそらくはこの奉行衆書状を携えた先遣隊は芳春院出立の数日前には伏見を發つていたはずである。吉継とともに和議交渉に参画した種村がそのあたりの事情を知らないとは考えられない。芳春院出立については使者口上に含まれたのか。芳春院下向

てください。（以下追伸）繰り返しますが、そちらに変事があれば必ず知らせてください。出陣指令（陣触）があれば、「両人の物」に早々にお知らせください。

前田利長（「はひ」、羽柴肥前守利長の「羽肥」）が「せうすい寺」（種村三郎四郎、肖椎寺）にあてた書状である。上杉景勝謀反疑惑に応じた家康の出陣（会津陣）や宇喜多家の内紛（宇喜多騷動）終息に触れているので、慶長五年（一六〇〇）の書状と確定できる。

種村は利長の父利家に仕え、おもに鑑働き（実戦で手柄を挙げる）で知られた人物であるが、この書状の時点ですでに引退して文芸の世界に軸足を転じ、肖椎子を称して京に活動の場を得ていた。

文面に「十七日の御状、昨日廿一日」、はいけん（拝見）申候」あるように、この書状は、五月十七日付種村の書状（上方発）への返書である。利長は慶長四年（一五九九）八月に帰国して以来加賀に滞在していたから、五月二十一日に加賀で種村の書状を落手し、この書状（返書）を認めたのである。

の実情（秘匿用件？）を含め、検討の余地があるのかもしれない。

もう一点。前田利長は人質という足枷もあってその後吉継とは袂を分かち、北陸で対峙することになる。しかし両者が戦場でまみえることはなかった。八月初旬に加賀大聖寺城を陥落させた利長が越前侵攻を企てた折は、急遽進軍を止め金沢に兵を帰した。越前に戻り利長軍に備えた吉継の謀略によると伝える軍記類もある。しかし、利長が金沢を発った時点では、石田・大谷の共同謀議と認識されていた政変に、毛利輝元や豊臣奉行衆も参画していることが判明し、家康自身戦略の変更を考えることになったことを考慮すべきであろう。利長もまたこの情報に接して自重したと考えるのが穏当である。

前田利長が再び金沢を發つのは九月十一日のこと
で、加賀・越前の西軍方諸城を接収しながら進んで、
同月二十二日に近江大津で家康に会う（『加賀藩史料』慶長五年九月条）。すでに大谷吉継は関ヶ原の
戦場で命を落としていた。利長は吉継が家康打倒の
謀議を企てたことをどのように受け止めたのか、知
りたいところである。

参考文献

笠谷和比古『論争関ヶ原合戦』（新潮選書、二〇二二年）
石垣匡基「秀吉死後の政局と大谷吉継の豊臣政権復帰」
（『日本歴史』七七二、二〇二二年）
北村太智「『関ヶ原の戦い』と北国」（『織豊期研究』二二
五、二〇二三年）
外岡慎一郎『大谷吉継』（戎光祥出版、二〇一六年）
外岡慎一郎『関ヶ原を読む』（同成社、二〇一八年）

奈良大学教授

外岡 慎一郎



関ヶ原合戦と城郭

滋賀県立大学名誉教授

中井 均



はじめに

関ヶ原合戦は慶長五年（一六〇〇）九月十五日の半日で勝敗が決した。しかし、石田三成は八月十日に大垣へ到着しており、東軍も八月二十三日には赤坂に布陣している。以後九月十四日の夜半に関ヶ原に移動するまで関ヶ原周辺で対峙することとなる。

その際に西軍は陣城を構えて布陣し、東軍も家康を迎えるため岡山に陣城を構築している。陣城とは戦争に際して臨時的に築かれた城のことで、作事（建築）よりも普請（土木施設）に重点の置かれた城である。しかし、戦争後は用いられることがなく、戦争そのものを物語る重要な遺跡である。

松尾山城跡

松尾山は小早川秀秋の陣として有名であるが、実は関ヶ原合戦に備えて築かれた山城であったことはあまり知られていない。

石田三成は大垣城に入ると、城主伊藤盛正に命じて松尾山に築城を行わせる。九月十二日に三成が増

田長盛に宛てた書状には「江濃之境目松尾之城、何れの御番所にも中国衆入可被置、御分別尤にて候」と記されており、松尾山城には中国衆、すなわち毛利輝元を入れ置くために築かれた城であることがわかる。それは西軍の大将である輝元を前線に出馬させる目的であったことがうかがえる。

実際に松尾山の頂上部には見事な城跡の遺構が残されている。土塁に圍繞された主郭の南端には完成した内柵形虎口が構えられている。主郭の南前面には土塁囲いの曲輪が構えられているが、これは馬出とみてよい。こうした構造から松尾山城は関ヶ原を望むために築かれたのではなく、大手は南側であったことがわかる。また、東側尾根筋に構えられた土塁囲いの曲輪、西方曲輪の柵形虎口など、縄張り構造は戦国時代後半の到達点を示している。

ところで、小早川秀秋の松尾山布陣についてはこれまで大谷吉継による采配の一環と考えられていた。しかし、二次史料ではあるが、『寛政重修諸家譜』所収「稲葉家譜」には「九月十四日、正成（稲葉）、

諸士と合議し、兵を率いて美濃におもむき松尾山の新城にいり、その城主伊藤長門守某を追ひ払う」と記されている。この新城とは戦国時代の松尾山城に対する新城であり、それは伊藤盛正によって築かれた城を指す。盛正は毛利輝元が来るまで松尾山城の守備をしていた。それを追い払って秀秋軍が入城したということは、不法占拠であり、西軍の作戦ではない。これは秀秋軍が最初から東軍として松尾山城に入ったことを示唆している。



南宮山毛利秀元陣跡概要図(中井均作図)

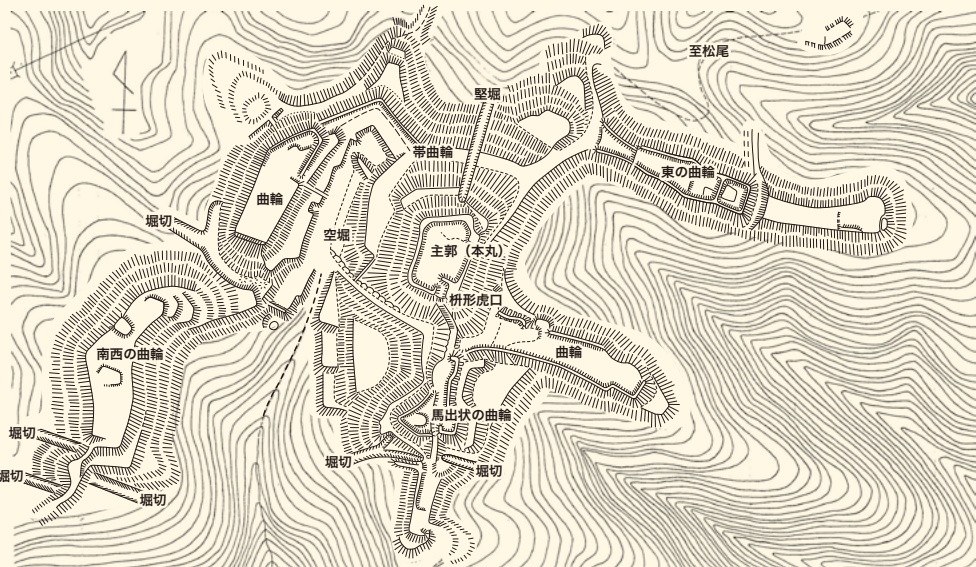
驚くことに、南宮山の東側尾根頂部に築かれた南宮山陣城跡からは関ヶ原が見えない。ここには九月七日に伊勢より北上してきた毛利秀元が陣城を構えた。

頂上部を削平して主郭とし、その北東部と西側に副郭を配し、両端を堀切で遮断するという極めて小規模な陣城であるが、単なる布陣ではなく、ある程度の在陣を目的として陣城を築いたことがわかる。

さらに縄張りとして注目されるのは主郭の南尾根に巨大な堀切を設け、北東部の副郭では南側に折の

付く巨大な土塁と、同じく南側斜面に豎堀が構えられている。関ヶ原が見えないだけでなく、その防御正面は完全に関ヶ原とは反対側に向けられる縄張りとなっている。それは眼下に広がる大垣の地を睨んでいる。

南宮山の東山麓には安国寺恵瓊、長宗我部盛親の陣城跡も確認されているが、いずれも大垣を正面に構えられている。九月初旬に布陣した西軍の諸将は大垣での決戦を想定して陣城を構えたわけである。



松尾山城跡概要図(中井均作図)

玉城山城

玉城山は関ヶ原の西方に位置する独立丘で、戦国時代の山城が構えられている。最近この玉城山城について千田嘉博氏は関ヶ原合戦に豊臣秀頼を迎えるために構えられた陣城であるとの説を唱え（二〇二〇年十二月十九日放送、NHK「決戦！関ヶ原 空からスクープ 幻の巨大山城」）、にわかに脚光を浴びることとなった。ここでは玉城山城跡が関ヶ原合戦とは無関係の城跡であることを述べておきたい。

まず、玉城山城跡を新発見としているが、古くは江戸時代に編さんされた『美濃古城史』に記されているし、二〇〇二年に刊行された『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第一集』には縄張り図も含めて報告されている。

その構造は広大な主郭と北側に構えられた帯曲輪と、南側の帯曲輪と腰曲輪、そして西側を遮断する巨大な堀切からなっている。

広大な主郭は秀頼と大軍を収容するためと唱えられているが、玉には大正四年（一九一五）に名古屋陸軍兵器補給廠関ヶ原分廠（玉火薬庫）が設置されており、その際に改変を受けている可能性がある。実際に高射砲が据えられた痕跡が残されているし、陸軍用地の境界杭も残されている。

北側帯曲輪の畝状豎堀群は確実な城郭遺構であるが、この防御施設は天文年間頃に列島全域に設けら

れるもので、とても慶長五年（一六〇〇）に用いられる施設ではない。さらに西端の堀切は巨大なもので、この城が西側を防御正面に向けた構造であることを示している。つまり関ヶ原を向いた城ではなく、江濃境目の城として築かれた境目の城である。

玉城山城跡は縄張りより築城年代は天文年間頃で、築城主体は美濃側と見られる。垂井町の菩提山城は竹中重治の居城として有名であるが、天文年間には岩手氏が城主であり、天文十三年（一五四）に美濃守護土岐頼芸が岩手四郎に宛てた書状に「江南北へ令堅約之切々時宣」とあり、美濃守護が江濃国境の城へ岩手四郎を入れたことが記されている。

また、岩手氏に替わって菩提山城に入った竹中重元は永禄三年（一五六〇）に六角義治の要請で近江に出陣し、浅井氏と戦っている。

畝状堅堀群の導入などから玉城山城も菩提山城と同じ頃に江濃国境に構えられた可能性が高く、関ヶ原合戦に際して築かれたものではない。

なお、玉城山城跡については江戸時代の『御合戦御備絵図』に「玉城山 天正年中浅井家出張跡」と記されている。天正年間に浅井氏はすでに滅んでおり、絵図の信頼度は低いですが、少なくとも江戸時代に玉城山城跡は美濃側の城ではなく、近江浅井氏の出城として認識されていたことは興味深い。



おわりに

松尾山城跡の縄張りには内枳形虎口、馬出状の曲輪、折の構えられた土塁線など、慶長五年の城郭構造を見事に伝えており、現在残されている城郭遺構が三成の書状に記された松尾之城であることはまちがいない。

一方、今、話題の玉城山城ではこうした発達した城郭構造は認められず、畝状堅堀群の存在より天文年間頃の築城と見るのが妥当である。

このように残された城跡の立地や構造は関ヶ原合戦を分析する重要な資料であると言えよう。

関ヶ原の戦いへの島津家の対応 ―なぜ義弘は寡勢だったのか？―

慶長五年（一六〇〇）九月十五日、島津義弘は石田方（西軍）として参戦し、その最終盤においてようやく兵を動かし、「島津の退き口」とよばれる撤退戦を展開した。義弘がなぜ序盤に兵を動かさなかったのか、摂津住吉への逃走ルートなどについて、様々な議論があるが⁽¹⁾、本稿の目的は、そもそも義弘はなぜ一五〇〇という寡勢で参戦せざるを得なかったのかを明らかにすることにある。

そもそも、島津家はどれだけの軍勢を動員できたのか。天正二十年（一五九二）三月、豊臣秀吉は朝鮮渡海を命じて「陣立て」を發布し、義弘は一万人の軍役を賦課されている。その後、文禄三年（一五九四）九月から島津領で太閤検地が実施され、文禄四年六月二十九日、秀吉は義弘に対して薩摩・大隅・日向諸県郡五万九千五百三十三石を宛行う。その後の慶長二年（一五九七）二月二十一日の「陣立て」でも、義弘は一万人の軍役を賦課されている。太閤検地を主導したのは、豊臣政権と島津家の取次を務めた石田三成であった。慶長四年（一五九

九）正月九日、五大老は義弘子息島津忠恒に対して、五万石を増し、石高は六万九千五百一十石となった。これと同時に石田三成は、島津領内の知行地再編を具体的に指示しており、一〇万石を政権からの軍役賦課に備えるための費用とし、三万石は京都詰め、五万石は島津領内に宛てると指定している⁽²⁾。つまり、三成は島津勢が常に五千程度は京都に詰めていることを想定しており、慶長五年七月に挙兵した際、義弘はこれくらいは率いてくるだろうと期待していた。

しかし、実際義弘は、緒戦の伏見城攻めに二百余しか率いておらず、九月十五日の本戦でも一五〇〇しかいなかった。これはなぜだったのだろうか。

一、義弘の立場

島津義弘（一五三五～一六一九）は島津貴久の二男であり、戦国期、島津家の全盛期を築いたのは、兄義久（一五三三～一六一一）である。義弘は兄を支える存在として、常に前線の指揮官として戦って

南九州大学非常勤講師

新名 一仁



きたが、兄義久に男子がでなかったことから立場が変わっていく。天正十三年（一五八五）正月、義弘は兄義久から次期家督含みで「名代」就任を要請され、四月に受諾する。これ以後、二人は家臣から「両殿」と呼ばれる⁽³⁾。

天正十五年（一五八七）五月に義久・義弘兄弟は、豊臣秀吉に降伏し、義久は薩摩国を、義弘は大隅を安堵され、日向国諸県郡は、義弘の長男久保（一五七三～九三）に安堵される。この時点で豊臣政権側は、義弘が義久の後継であり、久保がいずれ「惣領」になると認識していた⁽⁴⁾。同年十月、秀吉の命により、久保と義久三女亀寿（一五七一～一六三〇）の縁組みが決まり、久保の家督継承が決定する。翌天正十六年に上洛した義弘は、秀吉の意向で「侍従」に任官して公家成し、羽柴名字を下される。義久は島津名字のままであり、豊臣政権は義弘を義久の同格以上に引き上げ、島津家を代表する立場と認定した。

これにより、政権での代表である義弘と島津氏家

督の義久が並立する状況が生まれる。義久は戦国期以来の重臣による「談合」に基づく政策決定を重視する立場(5)を維持しようとし、政権側からの軍役賦課など次々と降りかかってくる要求への迅速な対応が出来ずにいた。一方、義弘は、取次の石田三成との関係を深めて、豊臣政権の方針に應えるべきと考え、国元の改革を求めるようになる。特に、天正二〇年(一五九二)に文禄の役がはじまると、二人の政権との距離感は広がり、徐々に対立へと転じていく。政権は島津家に一万人の軍役を賦課したが、義弘出陣時、従軍したのは二十数騎に過ぎず、島津勢が属する第四軍が出陣してから一か月後によくやぐ釜山入りする始末であった。これを義弘は「日本一の遅陣」と国元に伝え、義久ら国元の消極的対応を非難するようになる。島津家中の多くは、政権寄りの義弘よりも当主義久を支持し、義弘の家中統制は困難な状況にあった。

二、太閤検地と家督改替計画

義弘・久保父子による島津家中掌握を望む石田三成は、文禄二年（一五九三）八月、秀吉の命により義久を強制的に隠居させる計画を朝鮮に陣中の義弘に持ちかける。しかし、同年九月八日、久保は朝鮮巨濟島で急死し、この計画は未遂におわる。しかし、三成は、老中筆頭の伊集院幸侃（忠棟）を抱き

る。義弘がこの時石田方（西軍）についた理由については諸説あるが、豊臣政権に従属して以降の義弘と三成の關係を考えると、三成からの出陣要請に応じたのは自然なことであろう。この時点で義弘の勢力は二百ほどであり、在京中の島津豊久（義弘甥、日向佐土原三万石領主）と合流し、伏見城攻めに参加すると共に、七月十四日には国元に兵三五〇〇を派遣するよう要請する。これ以降、繰り返し国元に援軍を要請している。

一方、国元の義久・忠恒は、八月上旬には乱勃発と義弘が石田方に付いたことを把握する。義久は在大坂の家臣に娘亀寿の安全確保を指示するが、援軍派遣はおこなっていない。九月上旬、忠恒は組織的な援軍派遣をおこなわない、つまり父義弘を見捨てて判断をくだしたようである(6)。ただし、自発的な参陣は妨げなかったようであり、三々五々上洛している。八月二十日の時点で、義弘勢は豊久が国元から招いた軍勢と、在京中の北郷勢が加わり、一千人弱まで増え、最終的に九月十五日までに一五〇〇まで増えているが、石田三成が想定した五千には遠く及ばなかった。

おわりに――寡勢となった理由

義久・忠恒が援軍を送らなかった理由は五つ考え

込み、久保の後継をその弟忠恒（のちの家久、一五七六〜一六三八）にするよう働きかけ、これに成功する。

文祿三年三月、上洛した忠恒は秀吉から次期当主と認められ、六月には久保室だった義久三女龜寿と祝言をおこなう。これを画策したのも石田三成であつた。さらに三成は、同年九月から島津領内全域で太閤検地をおこない、冒頭に記したように、島津領全体が義弘に宛行われる。義久も一〇万石の蔵入地を与えられるが、歴代の守護所鹿児島から追い出される。この検地にともなう家臣への知行宛行は、三成と通じた伊集院幸侃が主導する。伊集院幸侃が六万石近い加増を受けて八万石を領した一方で、ほとんどの家臣たちは実質的に減封となつた。特に、朝鮮在陣中の忠恒は知行配当に関与できず、伊集院幸侃への憎悪を募らせる。

義弘・忠恒は、朝鮮からの帰還後の慶長四年（一五九九）正月、五万石の加増を受け、忠恒は無位無官からいきなり「少将」に任じられ公家成する。そして、同年二月、義久はついに家督を忠恒に譲って、帰国した。三成は忠恒を中心とする知行再編を指示しており、新当主忠恒への期待は大きかったが、忠恒は三成―伊集院ラインによる島津領への介入を嫌った。

られる。①二人は石田三成を憎んでおり、石田方を支援するつもりがなかった。②伊集院忠真が薩摩頼桂に残っており、謀叛の恐れがあった。③肥後の加藤清正は上洛せず精銳が残っており、伊集院忠真との連携が懸念された。④日向飢肥の伊東勢も主力は日向国内にあり、その動向が分からなかった。⑤島津以久（大隅垂水領主）が、伊集院忠真と内通しているとの噂があった。こうした懸念は現実のものとなる。

慶長五年九月十九日、加藤清正は石田方の小西行長領に進攻し、留守居の小西行重は島津家に援軍を要請する。老中島津忠長らは肥後に進攻し、一時加藤領の水俣などを占拠している。同月二十七日には、豊久不在の佐土原城に、重臣樺山忠助を派遣したところ、十月一日に、伊東勢が高橋元種領の宮崎城（宮崎県宮崎市）を攻め落とす。さらに隣接する島津領穆佐（同市高岡町）や佐土原に攻め寄せ、翌年五月に和睦するまで戦闘が続く。

また、八月二十五日には、島津以久が伊集院氏との關係を否定する起請文を出しているが、加藤清正は以久に書状を送り、伊集院忠貞と連携して挙兵し、忠恒に代わって以久の孫忠仍（義久外孫）を家督に据える計画を持ちかけていたことが、慶長七年（一六〇二）八月に發覺している⁽⁷⁾。これだけ国元とその周辺に不安定要因を抱えるなか、憎悪する

三、庄内の乱と関ヶ原の戦い勃発

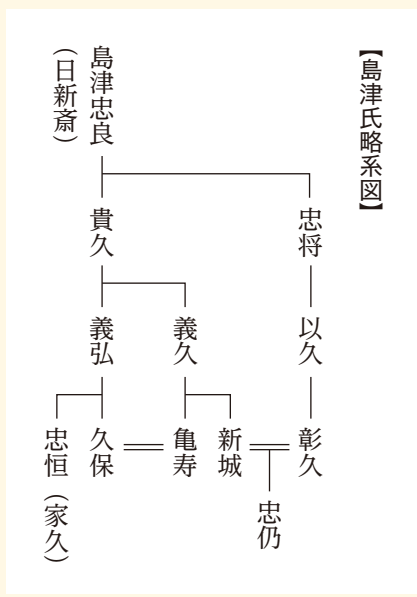
家督繼承直後の三月九日、忠恒は伏見屋敷にて手ずから伊集院幸侃を斬殺する。当然石田三成は激怒し、忠恒を高雄山に蟄居させるが、直後の閏三月、いわゆる「七将襲撃事件」により、三成は失脚する。代わって政権中枢を担った徳川家康は忠恒を赦免している。国元では、伊集院幸侃の遺児忠真が居城都城（宮崎県都市）を中心に反乱を起こす（庄内の乱）。忠恒は鎮庄のため下向し、義久とともに諸城を攻撃するが、肥後の加藤清正、日向飢肥の伊東祐兵の支援を受けた伊集院勢は頑強に抵抗し、忠恒は大きな被害を出す。徳川家康は、家臣山口直友らを派遣して、和睦仲介に乗りだし、慶長五年（一六〇〇）正月に和睦が成立する。伊集院忠真は島津家に忠誠を誓い、薩摩国穎娃（鹿児島県南九州市）に一万石を与えられた。

この和睦交渉と並行して、大老上杉景勝の上洛拒否が政治問題化し、四月には上杉攻めが決定する。この時、伏見にいた義弘は、家康から直接伏見城留守居を求められたという。それと共に家康は、忠恒に庄内の乱の戦後処理と領内統治に専念するように命じており、結果的に関ヶ原本戦に巻き込まれずに済む。

同年七月、石田三成と大谷吉継が挙兵し、大老毛利輝元が大坂城に入る。同月十七日に「内府ちかい

石田三成の要請に応じて援軍を派遣するという選択は、義久・忠恒にはなかったであろう。

- (1) 関ヶ原の戦いにおける義弘の動向については、桐野作人『関ヶ原 島津退き口 義弘と家康 知られざる秘史』（ワニブックスPLUS新書、二〇二二年）、高橋陽介『関ヶ原合戦の経緯』（ブイツーソリューション、二〇二二年）に詳しい
- (2) 『鹿兒島県史料旧記雑録後編』二一五～四八
- (3) 拙著『島津四兄弟の九州統一戦』（星海社新書、二〇一七年）、拙著『不屈の両殿』島津義久・義弘（角川新書、二〇二二年）
- (4) 尊経閣文庫蔵『九州御動座記』（『九州史料叢書 近世初頭九州紀行記集』九州史料刊行会、一九六七年）
- (5) 拙稿「『上井寛兼日記』にみる戦国島津家の政策決定過程——島津義久と談合衆の関係を中心に——」（『鹿兒島地域史研究』九、二〇二二年）
- (6) 前注(3)拙著二〇二二年、三四一～三四二頁。『鹿兒島県史料旧記雑録後編』三一～一六八
- (7) 『鹿兒島県史料旧記雑録後編』三一～六七四



関ヶ原合戦前日に毛利氏は 東軍と和議を結んでいたのか？

歴史研究者

水野 伍貴



不戦の密約

関ヶ原合戦（以下、本戦と表記）の前日にあたる慶長五年（一六〇〇）九月十四日、毛利輝元の重臣・吉川広家は、同じく重臣の福原広俊と協同して、東軍と不戦の密約を結んだ。徳川家康本人の誓紙ではないものの、徳川を代表する重臣・井伊直政、本多忠勝の連署で誓紙が発給されている⁽¹⁾。

大坂にあった毛利輝元は、この密約に関与していないとするのが通説である。しかし、光成準治氏は「密約に関する明示的な指示が輝元からあった可能性は低いと考えられるが、輝元および輝元側近からの何らかの示唆、あるいは輝元の意向を付度して、広俊が黒田長政ルートを有する広家と協同して、不戦工作を行ったと推測され、恵瓊も工作の遂行を知っていた蓋然性が高い」とし、輝元は密約に対して間接的に関与、あるいは黙認していたとする説を提唱した⁽²⁾。もし、光成説のとおりであるならば、実質的に毛利氏は本戦の前日に東軍と和議を結んでいたことになる。しかし、結論から述べると光成説

は再考の必要がある。

毛利氏と東軍の間に和議は成立していない

光成説によるならば、広家が結んだ密約は、間接的ではあるが輝元の意を酌んだものとなる。しかし、広家は後年に自身の行為を正当化するために書状の案文（下書き）を捏造しているが⁽³⁾、そこにおいても「このたびの惣和談（和議）のことは、そちら（大坂に）いる毛利の重臣（実質的に輝元を指す）へ伺ってから調えるべきでした」と、密約が広家の独断であつた旨が記されている⁽⁴⁾。自身の行為を正当化するのであれば、輝元の意を酌んで行動したこと、あるいは誇張して輝元の意を奉じたと記せば聞こえがいいが、そのようには記していない。

また、別の案文では「このたびは和睦が成立し、私（広家）は満足しております。（ところが）近ごろ世間の（私に対する）批判が聞こえてきました」と記されている⁽⁵⁾。つまり、毛利家中において広家の行動は、行動を共にした一部の者以外からは理解

されておらず、密約は広家の独断というのが動かし難い共通認識だったといえる。

密約が輝元の意を奉じていたものではないことは、本戦直後の九月十七日に福島正則と黒田長政が連署で毛利輝元へ宛てた書状において「吉川殿と福原は、毛利家を大切に思い、兩人（正則・長政）を頼った」と、輝元が密約を把握していないことを前提に状況を説明している点からも窺える⁽⁶⁾。

また、光成氏は安国寺恵瓊が広家の行動に対して全く逆を志向していたわけではないとするが、後の歴史的展開をみると違和感がある。家康は九月十八日付けで福島正則と黒田長政へ宛てた書状で「安国寺は、何としても生捕になされよ」と、恵瓊の捕縛を命じている⁽⁷⁾。光成説によれば、恵瓊は協調とまではいなくても、広家の行動を黙認していたわけであるから、梯子を外された形となってしまう。

同じく南宮山に布陣していた毛利秀元も、家臣・桂元延に宛てた感状で退却戦における活躍を賞していることから、東軍の追撃を受けたといえる⁽⁸⁾。密

約は広家の独断であり、毛利軍全体が東軍の攻撃対象から外れていたわけではなかった。ゆえに恵瓊は追捕の対象となり、秀元は追撃を受けたのである。

輝元には広家に賛同できるだけの判断材料がない

輝元が密約に対して間接的に関与、あるいは黙認したとする主張は次の根拠から否定できる。輝元が広家から密通に関する情報を伝えられていたと仮定しても、輝元が東軍と和議を結ぶか否かという問題で用いることができる判断材料は、黒田長政から広家に提供された八月八日付けの家康書状しかないのである⁽⁹⁾。そこには「輝元とは兄弟のごとく付き合っており、（西軍への関与を）不審に思っておりましたが、関与していない旨を聞いて満足いたしました」とあり、輝元が西軍に関与していないことを前提としているため、積極的に軍事行動をとってしまっている以上、何の期待もできない。

黒田長政の許へ派遣された藤岡市蔵（広家の家臣）の覚書⁽¹⁰⁾によると、七月末に服部治兵衛と藤岡市蔵の二人が使者として派遣され、黒田長政、さらには家康と対面した後に長政の許へ戻された。清須（愛知県清須市）にいた長政は家康の反応を受けて八月十七日付けで広家宛ての書状⁽¹¹⁾を書き、裏書きに八月八日付けの家康書状が写され、これを服部治兵衛に託した。治兵衛は八月二十三日に安濃津（三

重県津市）にいる広家と合流し、長政からの返事を伝えている。一方、藤岡市蔵は長政の陣中に留め置かれており、岐阜城攻略の後、広家の許に戻された。市蔵は隠密に通行しながら、関の地蔵（三重県亀山市）まで行ったところで、広家は美濃国にすることがわかり、南宮山で広家と合流したという。

広家が南宮山に到着したのは九月七日であるから、市蔵が広家と合流したのはそれ以降となる。広家が輝元に密通に関する情報を伝えたと仮定しても、市蔵がもたらした情報が輝元に提供され、輝元の反応が本戦前に広家に伝わるのは難しいだろう。広家が密通に関する情報を伝えたと仮定しても、輝元が用いることができる判断材料は、治兵衛がもたらした八月八日付けの家康書状が限界であり、毛利氏が積極的な軍事行動をとっている現状では、それに望みを託すのは危うい。輝元が広家の交渉ルートに期待を持ったとは思えず、通説どおり密約は福原広俊を巻き込んだ広家の独断であつたといえるよう。

註

- (1) 慶長五年九月十四日付井伊直政・本多忠勝連署誓紙「吉川広家・福原広俊宛」「大日本古文書 家わけ第八 毛利家文書之三」（東京大学出版会、一九七〇年）（以下「吉川家文書二」と表記）九一三号。史料の文面は現代語訳で掲載している（以下同じ）。
- (2) 光成準治「毛利輝元、吉川広家、安国寺恵瓊の関係と関ヶ原の戦い」（渡邊大門編『戦国史の俗説を覆す』柏書房、二〇一六年）。
- (3) 水野伍貴「関ヶ原合戦を復元する」（星海社新書、二〇二三年）第三章を参照。
- (4) （慶長五年九月十七日）吉川広家自筆書状案「大日本古文書 家わけ第九 吉川家文書之二」（東京大学出版会、一九七〇年）（以下「吉川家文書二」と表記）九一三号。史料の文面は現代語訳で掲載している（以下同じ）。
- (5) （慶長六年）吉川広家自筆書状案「吉川家文書二」九一七号。
- (6) （慶長五年）九月十七日付福島正則・黒田長政連署状「毛利輝元宛」『毛利家文書三』一〇二二号。
- (7) （慶長五年）九月十八日付徳川家康書状「福島正則・黒田長政宛」『普濟寺文書』（中村孝也『新訂 徳川家康文書の研究』中巻、日本学術振興会、一九八〇年）。
- (8) 慶長五年九月二十三日付毛利秀元感状「桂元延宛」『長府桂家文書』（山口県史・史料編 中世四、二〇〇八年）。
- (9) （慶長五年）八月八日付徳川家康書状「黒田長政宛」『大日本古文書 家わけ第九 吉川家文書之二』（東京大学出版会、一九七〇年）（以下「吉川家文書二」と表記）一四六号。
- (10) 御一乱之時御使二被遣候覚書「吉川家中并寺社文書一」（『愛知県史』資料編十三 織豊三、二〇一一年）。
- (11) （慶長五年）八月十七日付黒田長政自筆書状「吉川広家宛」『吉川家文書二』一四七号。

関ヶ原における毛利家

九州大学大学院特別研究者

光成 準治



本稿では、関ヶ原合戦をめぐる毛利家に関する五つの通説を、再検討していきたい。

第一に、毛利輝元は石田三成や安国寺恵瓊に騙されて西軍総大将に担ぎ上げられた、とされてきた。だが、輝元に対して上坂を要請した七月十二日付け前田玄以・増田長盛・長束正家連署状が到達したと思われる日（十五日）に、即座に広島を船で出立しており（「松井文書」四一六へ『松井文庫所蔵古文書調査報告書』）、相当の準備、あるいは事前の連絡があったと考えられる。また、上坂要請が公儀の命令であったため、やむを得ず従ったとする見解もあるが、そうであれば、高速航行する必要はなく、情勢を見極めるためにゆっくり進むはずであろう。ところが、輝元は七月十七日頃に大坂に到着しており、猛スピードで航行したことが判明する。これらの事実から、輝元の西軍への荷担は安国寺恵瓊の策謀に騙されたわけではなく、綿密に準備されたものだったといえよう。

第二に、吉川広家は一貫して親徳川家康派で、東

軍へ内通することによって毛利家を救った、とされてきた。だが、広家が当初から親家康派だったことを示す根拠とされてきた七月十四日付榊原康政宛書状案（『吉川家文書』九一二）について、（ア）作成直後に、安国寺恵瓊から石田三成らとの謀議には輝元の承諾を得ている説明をうけ、ある程度納得した、あるいは、反家康派が有利であると判断して発送を中止した、（イ）関ヶ原合戦終結後に、広家が当初から三成らの計画に反対であり、家康に内通しようとしていたことの証拠として偽作された、のいずれかだと思われる。つまり、当初から家康派だったことは証明できない。

また、広家は関ヶ原における戦闘の直前に、輝元や秀元に相談せずに、福原広俊（毛利氏譜代家臣）とともに不戦の密約を結んだ、とされてきた。その根拠は九月十七日に広家が作成したとされる書状案（『吉川家文書』九一三）である。だが、この書状案は広家の主張に過ぎない。広家内通の情報は九州にまで達しており（『黒田家文書』二一八）、輝元

妨げられて参戦できなかった、とされる。だが、現状の南宮山山頂付近を見ると、多くの兵を駐留させることができる空間があった痕跡はみられない。秀元家臣団の多くは、慶長四年（一五九九）の分知によって秀元領とされた地域（長門国・周防国吉敷郡）において、その時点で給地を有していた毛利氏直属家臣を秀元家臣団に編入したものだ。このため、秀元家臣となった有力国人領主層に対して、秀元の直接的な指揮権は及ばなかったと考えられる。そうすると、秀元自身は山頂付近に直属家臣とともに布陣し、その他の家臣は山麓も含め分散して布陣していたのではなかろうか。

秀元勢の一部だけでなく、その他の毛利勢も分散して山麓に布陣していたと考えられ、吉川勢が毛利勢全体の出撃を妨げる布陣になっていなかった蓋然性が高い。

第四に、安国寺恵瓊は西軍拳兵に当たり独断で石田三成らと謀議し、輝元を騙して上坂させた、とされる。だが、輝元が上坂後に騙されたことを知ったとすると、恵瓊は処罰されるだろう。ところが、恵瓊は毛利勢の軍事行動における指揮官として引き続き活動しており、輝元の恵瓊に対する信頼も揺らいでおらず（譜録ま二九）、この説は否定される。

次に、恵瓊勢の布陣位置について、先に引用した吉川広家書状案（『吉川家文書』九一三）では、南

宮山山頂からの下山を妨げる位置にあったとされている。南宮山に布陣した時点では、毛利勢は大垣城の後詰め役割を担う予定だった。したがって、恵瓊陣は南宮山山麓の大垣方向を見据える最前線にあったと推定され、毛利勢の先鋒は広家ではなく、恵瓊だったといえよう。では、なぜ恵瓊を含む毛利勢は動かなかったのか。突発的に関ヶ原における戦闘が起こってしまったため、全軍を指揮できる唯一の存在である輝元不在の状況では、不戦の密約があるとなかろうと、毛利勢は動くことができなかった、というのが真相だろう。

また、関ヶ原における敗戦後、恵瓊は家康との和議が成立したことを聞いて、切腹させられることを覚悟している。毛利氏家中では、三成らとの謀議は恵瓊の独断ではなく、「使者」に過ぎないと認識されていたが（譜録ま二九）、恵瓊は自らが独断で謀議したことにして、責任を一身に負って毛利家を救おうとした。恵瓊は毛利家存続の恩人だったのである。

第五に、小早川秀秋は毛利両川の一翼を担うべき存在でありながら東軍へ寝返り、その結果、毛利一族の結束は崩壊した、とされる。だが、関ヶ原合戦当時の秀秋家中には、秀秋の養父隆景が北部九州地域に移封される以前からの小早川氏家臣はほぼ残っていない。輝元の養女として秀秋と婚姻した長寿院

が気づかなかったとは考え難い。そのうえ、輝元と

福原は再三連絡をとっており（山口県文書館蔵「毛利家文庫」譜録ま二九）、福原が輝元に無断で密約を結ぶとは思えないが、輝元はその行動を黙認していたと考えられる。

広家が一貫して親家康派だったわけではないとすると、なぜ最終的に広家は内通したのか。吉川勢が伊勢国安濃津城攻撃において大きな損害を蒙ったからだろう。吉川勢の戦闘能力は大きく低下しており、広家は戦闘意欲を失っていた。毛利家を守るという意識がなかったわけではないが、吉川家の私的利益が内通に大きく影響したといえよう。さらに、関ヶ原合戦当日、吉川勢は毛利勢の先鋒だったとされるが、右記の損害状況をみると、先鋒を務めることができる状況になかった。

第三に、大軍を率いて南宮山山頂に布陣していた毛利秀元は、関ヶ原における戦闘当日、山を下って西軍に荷担しようとしたが、麓に布陣した吉川勢に

もこの時点では秀秋と離縁しており、秀秋を当主とする小早川家は、毛利家とは関係のない家となっていた。実際に、毛利家に残されている関ヶ原合戦前後期の史料には、秀秋に関する情報は皆無に近い。秀秋はもはや「両川」といえる存在ではなく、関ヶ原合戦前後の秀秋の行動は毛利家とは無関係だった。

このように、関ヶ原合戦をめぐる毛利家の動向に関する通説には、史実と異なる点も少なくない。それらは江戸期に成立した軍記類の影響をうけたものと考えられる。関ヶ原合戦の実像を明らかにするためには、江戸期の創作を排除していく必要があるだろう。



南宮山・毛利秀元陣跡

矢部 健太郎



関ヶ原合戦研究の新視点

関ヶ原合戦をめぐる研究には、周知のように長い蓄積がある。しかしながらその多くは、徳川家康や石田三成といった個人に注目した研究、この合戦を徳川幕府成立の前史と位置づける研究、「合戦」そのものの研究だったといつてよい。

もちろん、そうした研究自体にも大きな意義はあるが、本来、関ヶ原合戦研究の前提として留意すべきだったのは、この戦いを節目に弱体化していった豊臣政権がどのような権力構造であったのか、秀吉はどのような政権構想を有していたのか、という視点である。従来の諸研究が抱えている大きな問題は、第一にそうした視点が欠けていたこと、第二に豊臣政権研究の進展に十分な注意が払われていないこと、以上二点であった。

私は、関ヶ原研究会における講演「秀次事件による政局の混乱と関ヶ原合戦」（二〇二四年二月十八日）の冒頭、いわゆる関ヶ原合戦の古典的通説を以下のように整理した。

秀吉から政権を委任された「五大老」筆頭の

不可能だった、ということになる。やはり「武家家格」は、秀吉死後の政権維持のための「装置」として、極めて有効だったといえよう。

先に「武家家格」の特徴について「原則的なその不変性」と記したが、実はその地位を変動させうる人物もいた。いうまでもなく、「豊臣摂関家」当主の秀吉である。例えば秀吉は、弟秀長の病状が思わしくないのでみて小田原出兵前後に前田利家の地位を引き上げ、戦後には「清華成」させている。それは、原則「不変」であるべき家格が上昇した一例ではあるが、利家の小田原出兵での軍事行動は秀吉の指示下であるし、利家自身が「清華成」を強固に望んだわけでもないの、秀吉死後の政権運営を見据えた秀吉の判断といつてよい。朝鮮出兵（壬辰戦争）開始時の家康と利家の連携を「二大老」の萌芽として高く評価する向きもあるが、それは秀吉の死による政権の動揺を抑え、利家の急な家格上昇に説得力を持たせるための秀吉の施策とすべきだろう。

「清華成」大名の顔ぶれは、当事者の死去・失脚などで時により入れ替わりが生じたが、秀吉最晩年のメンバーは徳川・前田・宇喜多・毛利・上杉・小早川の六家、および羽柴庶家であり、前六家の当主たる家康・利家・秀家・輝元・景勝・隆景は、いわゆる「五大老」と一致する。しかしながら、豊臣期の「大老」に関する最も古い史料は、管見の範囲で

徳川家康は、上杉討伐中に「逆臣」石田三成らが反旗を翻すと関ヶ原に急行。寝返りをためらう小早川秀秋に「問い鉄砲」をしかけて決断させ、西軍は大混乱に。この合戦の勝利で家康は豊臣政権を倒し、徳川幕府が成立。

まず、末尾のような理解、すなわち関ヶ原合戦で豊臣政権が崩壊し、ただちに徳川幕府が成立した、という理解は、家康の將軍任官が合戦の三年後、豊臣宗家の滅亡が合戦の十五年後ということを見るだけでも、そもそも成り立ちがたい。また、合戦前に発布された「内府ちがいの条々」とその関連文書をみれば、秀吉死後の「十人衆」（いわゆる「五大老」「五奉行」）が、家康対その他九名となったこと、つまり家康が孤立した状況が明らかになるため、石田三成を「逆臣」とすることも不適切である。

加えて私は、二〇〇一年二月に発表した「豊臣『武家清華家』の創出」（『歴史学研究』七四六）以降、豊臣政権が織田信雄・徳川家康以下の有力大

は、林羅山が寛永十九年（一六四二）にまとめた『豊臣秀吉譜』である。すなわち、「大老」文言の初見は秀吉の死から四十四年後のことであり、そこには多分に徳川幕府による自己正当化の思考、秀吉から家康への「政権委任説」創作の意図が反映されていたといえよう。

改めて、関ヶ原合戦前後の政治情勢をみれば、その過程は秀吉の政権構想の破壊とはいえ、政権そのものの破壊には至らなかった。また、徳川軍単独の勝利ではなく、豊臣大名も多数参戦していた。すなわち、豊臣政権内部における「反家康派」対「親家康派」の戦いだったのであり、政権首班Ⅱ秀頼という体制は残存したのである。

よって、関ヶ原合戦後も、徳川家には①「武家家格」による豊臣・徳川の主従関係からの脱却、②「豊臣姓・羽柴名字」からの脱却、という二つの課題が残った。それらは、源姓徳川氏による征夷大將軍の世襲化と大坂の陣により、ようやく達成されたのである。逆にいえば、秀吉の残した政権維持装置は、それほどまでに強固なものだったということになる。

私が発掘した「清華成」大名や「武家家格」論については、学界においてはおおむね承認されているものの、一般の家康ファンには不満を持たれる方も少なくないようである。ただ、改めて強調したいの

名を「清華成」させて「公家成」「諸大夫成」の上位に置くとともに、関白を世襲する「摂関家」たる豊臣宗家との格差を明示したことに注目している。従来、豊臣政権を説明する際に重視されていた「武家官位」の序列に加え、「武家家格」による序列に注目する意義はどこにあるのか。

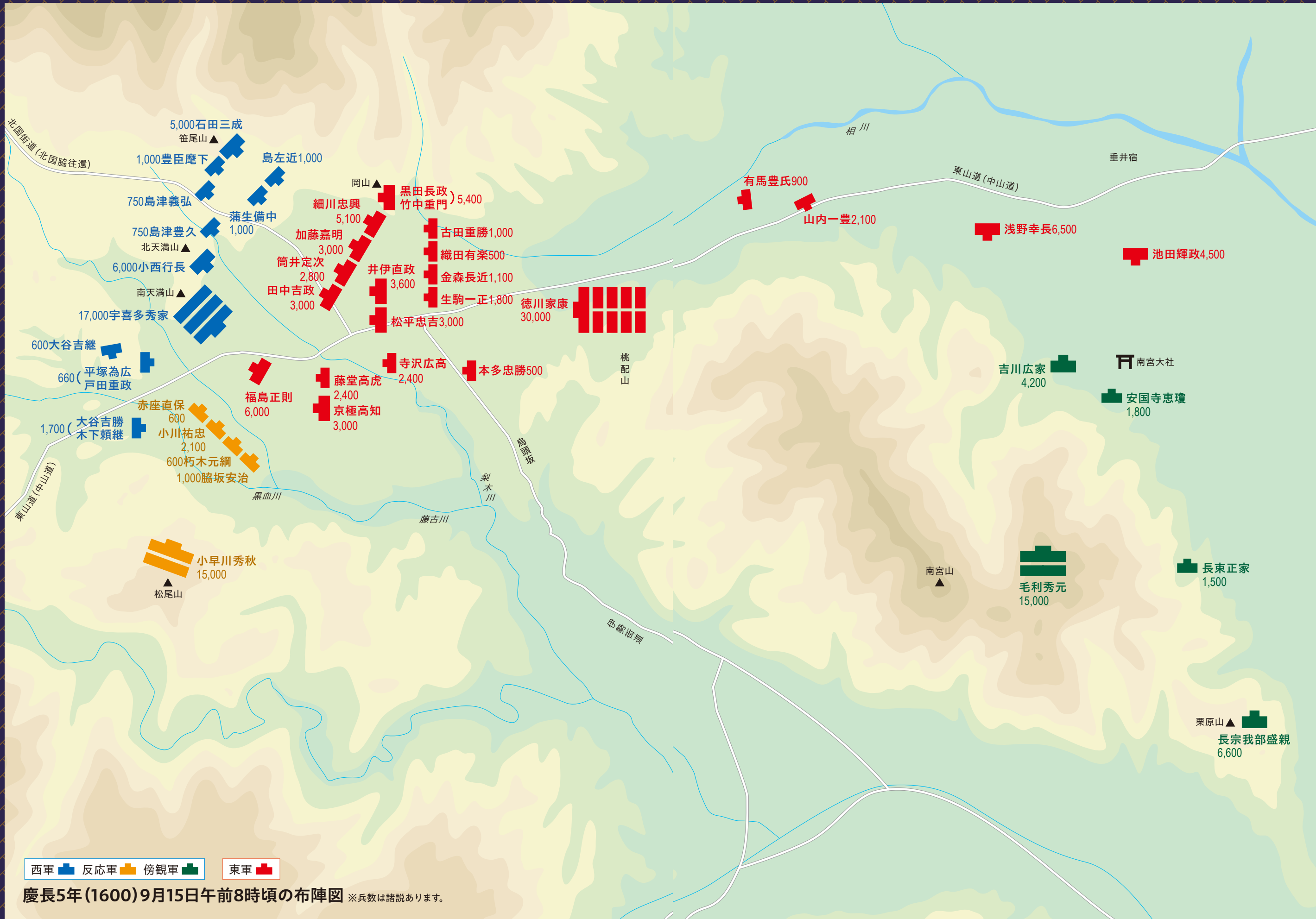
「武家官位」の特徴は「個人の序列」ということと、経年によって上昇・変動することである。「武家官位」上位の者が死去・失脚すると、自然の成り行きとして下位の者が相対的にその地位を上昇させる。結果、秀吉死後の「武家官位」最上位は徳川家康となり、豊臣政権の最高権力者「五大老筆頭」Ⅱ家康である、という評価が通説化していた。

一方、「武家家格」の特徴は個人ではなく「家の序列」ということと、原則的なその不変性である。公家社会の先例を踏まえば、「清華家」（「清華成」）が「摂関家」に上昇する可能性はほぼゼロである。すなわち、「清華成」の徳川・前田家らが幼主秀頼の「豊臣摂関家」の上に立つことは制度的に

は、関ヶ原合戦やその後の家康による天下平定事業は決して平坦な道のりではなく、危機的状況や複雑な政治判断の連続だった、ということである。晩年の秀吉が家康・利家に政権運営を託したという旧来の「五大老」筆頭・家康像に固執し、「清華成」として秀吉に警戒されていた家康の姿を認めないことは、かえって家康の業績を軽んじることになる。新たな視点にたつて中近世移行期を再評価する余地は、なお多く残されているのである。



徳川家康最後陣地



関ヶ原合戦関連年表

月日	出来事
慶長三（一五九八）年	
五月	豊臣秀吉、発病する
八月	豊臣秀吉、秀頼に忠誠を尽くす旨の誓紙を五大老と五奉行に互いに納めさせる
八月十八日	豊臣秀吉、伏見城で病没する
慶長四（一五九九）年	
正月十日	豊臣秀頼、前田利家とともに伏見城から大坂城に移る
正月十九日	四大老と五奉行、政略結婚を推し進める徳川家康を詰問する
二月五日	徳川家康、四大老・五奉行と和睦、誓紙を交わす
二月二十九日	前田利家、病身を押して伏見の徳川家康を訪問する
三月十一日	徳川家康、大坂の前田利家を見舞う
閏三月三日	前田利家、大坂で病没する
閏三月四日	加藤清正、浅野幸長、福島正則、黒田長政、細川忠興ら七武将、石田三成を襲撃する
閏三月十日	徳川家康、石田三成を佐和山城に蟄居させる
閏三月十三日	徳川家康、伏見の邸宅から伏見城西の丸に移る
閏三月二十一日	徳川家康と毛利輝元、起請文を交わし交誼を結ぶ
九月七日	徳川家康、重陽の祝儀のため大坂へ向かう
九月九日	増田長盛、徳川家康暗殺計画があることを家康に密告する
九月二十七日	大坂城で重陽の祝儀が開かれる
九月二十七日	徳川家康、大坂城西の丸に入る
十月三日	徳川家康、諸大名に前田利長の征伐を表明する
十一月	出羽の戸沢政盛、上杉景勝の不穏な動きを徳川家康に伝える
慶長五（一六〇〇）年	
二月	越後の堀秀治の家老堀直政、上杉景勝の不穏な動きを家康に伝える
三月	上杉景勝の家臣藤田信吉、徳川家康に主君の逆心を訴える

月日	出来事
七月二十六日	東軍、福島正則、池田輝政を先鋒に順次西上する
八月一日	西軍、伏見城を攻略する
八月三日	東軍の前田利長、大聖寺城を攻略する
八月四日	徳川家康、小山を出立する
八月五日	徳川家康、江戸城に入り、諸大名に百二十通を超える書状を送り、戦況の改善と多方面の調略に腐心する
八月八日	東軍の前田利長、浅井畷で西軍の丹羽長重に敗れる
八月十一日	石田三成、大垣城に入る
八月十四日	東軍先鋒の福島正則、池田輝政、正則の居城である清洲城に入る
八月十六日	東軍、清洲城に集結する
八月十九日	東軍の徳永寿昌、市橋長勝、福東城を攻略する
八月十九日	東軍の徳永寿昌、市橋長勝、高須城、駒野城、津屋城を攻略する
八月二十日	徳川家康の家臣村越茂助、清洲城に赴き、東軍の諸將を督戦する
八月二十日	東軍の諸将、清洲城で軍議を開き、岐阜城攻略を決める
八月二十日	東軍の池田輝政、浅野幸長ら、米野の戦いで西軍の織田秀信軍を破る
八月二十二日	東軍の福島正則、田中吉政、加藤嘉明、細川忠興、藤堂高虎、京極高知ら、加賀野井城、竹ヶ鼻城を攻略する
八月二十三日	東軍の福島正則、池田輝政ら、岐阜城を攻略する
八月二十三日	東軍の黒田長政、田中吉政、藤堂高虎ら、河渡の戦いで石田三成の家臣舞兵庫を破る
八月二十四日	東軍の諸将、赤坂に集結する
八月二十四日	西軍の毛利秀元ら、安濃津城を攻撃する
八月二十四日	徳川秀忠、宇都宮を発ち、中山道を西上する
八月二十六日	西軍、安濃津城に降伏を勧告し、翌日開城させる
八月二十六日	石田三成、佐和山城に戻る
八月二十六日	石田三成、大谷吉継に急ぎ関ヶ原へ来るよう使者を送る
九月一日	徳川家康、江戸城を発ち、東海道を西上する
九月三日	西軍の大谷吉継ら、北陸から転進して関ヶ原の山中村に布陣する
九月三日	西軍の宇喜多秀家、伊勢から転進し、大垣城に入る

月日	出来事
四月一日	徳川家康、上杉景勝の執政直江兼統に詰問状を送る
五月三日	徳川家康、直江兼統からの返書(世にいう「直江状」)を受け取り、会津征伐を決定する
五月十七日	前田利長の母芳春院、人質として江戸に向かう
六月六日	徳川家康、大坂城で諸大名に会津征伐を表明する
六月十五日	豊臣秀頼、徳川家康に金二万両、米二万石を下賜する
六月十八日	徳川家康、鳥居元忠らを伏見城の留守居とし、会津征伐に向かう
七月二日	徳川家康、江戸城に入る
七月二日	石田三成、会津征伐に向かう途中の大谷吉継を平塚為広とともに美濃垂井から佐和山城に呼び、徳川家康打倒計画を告げる
七月十一日	大谷吉継、石田三成に与することを決める
七月十二日	石田三成、佐和山城で大谷吉継、安国寺恵瓊、増田長盛らと軍議を開き、毛利輝元に協力を仰ぐ使者を送る
七月十六日	石田三成、会津征伐に従軍した諸大名の妻子を人質に取ろうとするが、失敗する
七月十七日	毛利輝元、大坂城西の丸に入り、西軍総大将となる
七月十七日	増田長盛、前田玄以、長束正家が連署により徳川家康を弾劾する「内府ちかひの条々」を発出する
七月十九日	西軍、伏見城を攻撃する
七月十九日	徳川家康、増田長盛から石田三成の不穏な動きを伝える知らせを受け取る
七月二十一日	東軍、徳川秀忠を司令とする前軍約三万七千五百が会津へ出陣する
七月二十一日	西軍、約一万五千の軍勢で、細川幽斎が籠城する田辺城を攻撃する
七月二十一日	東軍、徳川家康率いる後軍約三万一千八百が会津へ出陣する
七月二十二日	徳川家康、近江の京極高次から大坂の変事を知らせる書面を受け取る
七月二十四日	徳川家康、伏見城の鳥居元忠から石田三成が挙兵した旨の連絡を受ける
七月二十五日	徳川家康、小山で評定を開き、会津征伐を中止し、石田三成を討つことを決める

月日	出来事
九月六日	徳川秀忠、真田昌幸の上田城を攻撃する
九月七日	西軍の毛利秀元、吉川広家、長束正家、安国寺恵瓊、長宗我部盛親ら、伊勢から転進して南宮山に布陣する
九月八日	石田三成、佐和山城から大垣城に戻る
九月九日	徳川秀忠、家康から急ぎ西上を命ずる書状を受け取り、上田城を攻略できないまま西上する
九月十一日	徳川家康、清洲城に入る
九月十三日	東軍の細川幽斎、後陽成天皇の勅命を受け、田辺城を開城する
九月十四日	徳川家康、中山道赤坂宿に着陣し、岡山の本陣に入る
九月十四日	西軍の小早川秀秋、松尾山城に入る
九月十五日	石田三成の家臣島左近、杭瀬川の戦いで東軍の中村一栄らを破る
九月十五日	東軍の京極高次、大津城の開城を決め、翌日、退去する
九月十五日	西軍主力部隊、深夜に大垣城から関ヶ原へ陣を移す
九月十五日	東軍、未明に西軍を追うように関ヶ原へ布陣する
九月十七日	関ヶ原で両軍が激突し、約六時間の戦闘で東軍が大勝する
九月十九日	東軍、石田三成の居城佐和山城を攻略する
九月十九日	小西行長、伊吹山中で竹中重門の家臣に捕縛される
九月二十一日	石田三成、伊吹山中で田中吉政の配下に捕縛される
九月二十三日	安国寺恵瓊、京で捕縛される
九月二十四日	西軍の福原長堯、大垣城を開城して伊勢に退去する
九月二十七日	毛利輝元、大坂城の西の丸から退去する
九月二十七日	徳川家康、大坂城の西の丸に入る
九月三十日	長束正家、居城の近江水口城を池田輝政に攻められ、自刃する
十月一日	石田三成、小西行長、安国寺恵瓊、京の六条河原で処刑される
十月二日	徳川家康、増田長盛の領地大和郡山を没収し、高野山に追放する
十月三日	島津義弘、薩摩に戻る
十月十日	徳川家康、毛利輝元の所領を没収し、周防・長門二箇国を与える
十月十五日	徳川家康、大坂城で東軍諸將に論功行賞を発表する
慶長八（一六〇三）年	
二月十二日	徳川家康、征夷大將軍に任じられる